

凝視される身体、虐げられる身体 —張資平の作品における「身体性」をめぐって

祝 世潔

【要約】

張資平は中国新文学（五・四運動以後の白話文による中国現代文学）の歴史的文脈で語るには些か厄介な人物である。

彼が後世に名を残したのは、郭沫若や郁達夫と同じく、初期創造社における重要なメンバーであり、20・30年代の人気恋愛小説作家でもあるからだ。しかし、売れっ子小説家として人気を博する一方、彼に対する批判の声も30年代から次第に高くなり、青年読者に媚びる下品な恋愛小説を量産する職業作家というマイナスのイメージが定着していく。それに加えて「漢奸」のレッテルまでも貼られるようになる。彼は文学・政治・金銭の交差する中で混沌とした色に染められ、「啓蒙」と「革命」という現代文学の文脈では、常に曖昧かつ戸惑いの視線を向けられることとなった。

先行研究では、張資平の小説は主に「千篇一律な構造」と「過剰な肉欲描写」の二点をめぐって批判される。また彼は文学創作の際、「観察」という態度を取り、作品が「写實的」で「自然主義」の技法を採用していると評され、日本の自然主義文学から栄養を吸収したと考えられている。

しかし、先行研究には以下のような不足点がある。まず、身体を道徳に結びつけることにより、肉欲の過剰な表現という批判も、性の解放を通じて古い性道徳に抗う反抗精神という再評価も、根底にある身体性を見落としてしまう傾向が見られることである。また、張資平の小説を「千篇一律」だと批判はするが、実際には各作品間の呼応関係を見逃しがちであり、テキスト自体の考察が十分に行われていない。また、「自然主義」の日本要素を論ずる際、日本文学のみが考察対象となり、張資平が日本に留学した10年間の見聞に含まれる身体体験をおろそかにしてきた。

張資平の小説では、「性的身体」が大きな役割を担っている。欲望に苛まれ、快楽に溺れ、苦痛を感じ、病気にかかる主体として、「身体」は張資平の描き出した恋愛・肉欲・苦痛を結びつけるキーワードであり、張資平作品の根本的な拠り所でもある。本論では、「身体」という視座を通じ、張資平の書いた「愛」と「生」の実態を追求し、革命・都市・近代化など様々な脈絡で彷徨っていた張資平の心境の一端を明らかにする。

第一章「身体の実」を写す」では、張資平の「科学的観察」は一体どこに向けられたのか、またそれは彼の「肉欲」に溢れると批判された小説描写とどのように関わっているのかについて解説する。

まず、「苔莉」の表現手法を通し、身体を外部から伝わる客観的情報の受け皿として傍観する視点を考察する。張資平と同時代の文学者の多くは、精神恋愛を崇め奉る時代風潮の中で、主に快楽や苦痛などの主観的感情に注目したが、張資平の場合は、身体感覚のほうに目を向けただけではなく、外部の刺激を受け取る身体と、主観的感情との間にあるはずのリンクを敢えて切断することにより、身体の物理的反応をあたかも傍観者かのように観察する表現を獲得している。

次に、このような身体への関心の由来を追求する上で、日本文学の直接的な影響ではなく、日本留学中の身体体験および身体に関する時代の風潮を取り上げる。1912年から1922年まで、張資平は大正期の日本において女学生や女給らから感覚的で身体的な体験をしている。また、大正の恋愛ブームや性科学ブームのなかで、男子学生の身体は性科学と性教育の対象として位置付けられ、身体の欲求に対する「科学的」な注目が以前にも増して高まっていた。張資平が恋愛の場面を描写する際、常に身体の反応に注目するのは、明治から大正までに形作られた社会のトレンドに呼応したものと考えられる。

最後に、「沖積期化石」に設けられた自分の外にある「私」という構造を解析し、「傍観者の視線」から見える張資平の独自性を明らかにする。

張資平は「我」から一步離れた距離に立ち、「我」というものを冷静に眺め、自分の全ての感情や欲望を冷徹に解剖する。張資平の作品における恋愛のパターンが「千篇一律」と批判されるのも、科学的アプローチへの執着的とも思えるこだわりが一因かもしれない。一般的に、恋愛は「自己」の解放や「個」の精神と関連付けられるが、情動や欲望などの身体的要素がより支配的であるとすれば、科学的な規則が存在し得ることになる。このように恋愛が科学化されることで、個々の「事」から体系的な「物」へと変化し、結果として個性が失われる可能性もあろう。張資平が身体感覚に注目するのも、恋愛の場面におけるリアクションの類型化も、「科学的」な恋愛を表現する意欲から生まれたものと見なすことができる。

第二章「張資平の恋愛哲学（上）：「愛」に懐疑の目を向けて」では、愛の宗教であるキリスト教への懐疑と、「愛」の表現に潜む虚偽性に対する冷ややかな態度を明らかにする。

まず、第一節では、キリスト教教義の「赦し」や「愛」への反逆の姿勢を論じる。先行研究では、張資平は教会の信者たちを偽善者として否定する一方で、教義自体には反対していないと指摘される。しかし、彼の作品ではキリスト教の基本教義を嘲笑うかのような表現が散見される。例えば、神聖な礼拝堂を肉欲に溢れる場に変えることは、肉欲を戒めるキリスト教の教義を嘲笑する態度と言える。また、「懺悔」を実用主義的な戦略、赦しを強要する脅迫、精神的な免罪符として濫用し、キリスト教の「懺悔」と

「赦し」の制度に根本的な拒否と嫌悪を示す。さらに、聖書に基づいて構築する恋愛の

受難者物語への妄想も無慈悲に打ち砕く。張資平はキリスト教の基本精神に対して深い不信感を抱いていると考えられるのだ。

第二節では、「愛」という主張の裏に潜む虚偽性を指摘する。情熱的なラブライターで恋愛の演出をする場合にも、「愛」という表現は心情の虚偽性を隠すベールになり得る。自由恋愛や恋愛神聖の主義主張を揶揄し、恋愛の「自由」を享受できるのは男性のみであり、恋愛の苦汁を飲むのは女性であるという現実を、繰り返し呈示している。

第三節では、「苔莉」という作品を例に、張資平の作品で表現された「霊」と「肉」の複雑な関係性を探求する。霊的な愛に至るためには、肉の欲望が唯一の通り道であることを示唆し、「純潔な愛」というイデオロギーの虚偽性を冷笑する。愛が肉体的な欲望を介さなければ表現できないと主張する一方、肉体は脆弱で変わりやすいため、愛を求める心も虚しいまま満足できない。この不安定な霊肉観こそが、張資平の作中人物が常に欲望に塗れているようでありながら、精神的空虚さを感じる理由だと考える。

第三章「張資平の恋愛哲学（下）：「愛」より「生」」では、「恋愛」のために自分を捧げることがせず、「愛」ではなく「生」を選ぶ女性たちの奮闘に注目する。

第一節では、張資平の作品のなかで、「女学生」という新しい女性の身分がどのような視線で捉えられているかを考察する。女学生は、日本より舶来した女学生幻想のもとに、「性的放縦」と「良妻賢母」という二面性を負わされていたが、張資平は、単に嫁入りの資格を狙うための女学生や芸者のような立場に置かれた女学生を提示することで、彼の偏見が作品中に浮き彫りにされる。

第二節では「最後の幸福」を取り上げる。新文学における女性はいしばしば哀れな被害者か勇敢な反逆者として登場するが、張資平が描く女性は、単純な被害者や反逆者の側面だけではなく、伝統と革新の隙間を逆手にとり、新旧の道徳にとらわれず、父権社会の中で生き抜くために利用可能な手段をすべて駆使して交渉する。結局は多くが失敗に終わってしまうのだが、彼女らが持つ生存本能は生き生きとした人間性の輝きを放っている。「最後の幸福」の美瑛がその一例で、父権制を欲望の後ろ盾にしながら、女性の欲望を堂々と主張している。美瑛の欲望は強い身体性を帯びており、身体が彼女の行動の原動力になっている。他者による束縛や示唆ではなく、内的な欲求によって行動するという女性像は、「個」の異彩を放っている。

第三節では「長途（長い道のり）」を取り上げる。「長途」は、田舎から出て冷酷で汚濁な都市に身を寄せる碧雲が、人生の活路を模索する「長い道のり」の話であり、生きる道を模索する女性が、些かなりとも安息を求めるために男性優位の社会に迎合し、却って獲物として狙われてしまう不運な物語で、一種の「都市文学」として読むことができる。碧雲は何人かの男性の間を転々とするも、はっきりと「恋愛否定」を宣言して

いる。張資平のこれまでの女性墮落物語とは異なり、碧雲の人生選択は男性に対する愛や欲望によるものではなく、生きるためのある種の合理的な判断に基づいている。

第三章に挙げた女性は、利己主義に映るかもしれない。しかし、彼女たちの身体重視・欲望重視は明確に「自己」が存在する証拠でもある。彼女たちにとって、利己主義を主張することは、男性中心の社会に挑んで生き残るための手段の一つであった。

第四章「恋愛結婚の末路、苦難の「妻」—張資平の身辺小説」では、ずっと看過されてきた張資平の「身辺小説」、特に「妻」という女性群に注目する。五四後に自由意志で結ばれる近代的核家族の中でなお重荷を背負っている妻や、伝統的な大家族の桎梏からは解放されても、都市化や政治変動のなかで揺れ動く夫婦の関係性を考察する。さらに、身辺小説を恋愛小説とは別のジャンルとして分断するのではなく、恋愛・結婚・伴侶の関係性という問題系の一貫性より、恋愛小説の延長として解釈する可能性を探る。

第一節では、「小兄妹」を通して、都市の中で孤立している近代家族における女性の出産・育児・家事の負担を描き、近代家族の不安とその中でより一層大きい負担が課せられた「妻」の桎梏を呈示している。

第二節では、「百事哀」を通して、自由恋愛で結ばれる家庭の行く末の無情さを提示し、五四の自由恋愛結婚熱に冷や水をかけるかの如き張資平の表現について分析する。

第三節では、女学生から「良妻賢母」へ凋み、都市の中の一室に閉ざされ、職業や生家などの道が全て塞がれ、夫の庇護に縋り付き活路を乞うしかない妻の苦境を炙り出す。

第四節では、利己主義で暴力を振るう夫の「悪」を、言葉を憚らずに暴露する張資平の筆致には、田山花袋『蒲団』の心境描写を模倣する「偽悪的」な痕跡が見られることを論ずる。夫は妻を酷使する家庭の暴君であると同時に、妻子を守る家庭の大黒柱でもある。「家族の集団性の強化」という近代家族のもとで、家族成員は強力なつながりを持つ一方、閉ざされた過剰に肥大した親密な人間関係のなかでは、恒常的な衝突を起こすのである。

張資平の身辺小説は、家族の反対を退け、自らの自由意思で夫婦睦ましい近代家族を築いた女学生の妻が、貧困生活のなかで妊娠・出産・育児・家事からの過労に苦しみ、利己主義の夫に搾取され、最終的にすべての逃げ道が塞がれる、という女性の悲劇に注目する。恋愛結婚の「そのあと」の議論が避けられている当時の時代風潮に相反して、張資平は恋愛結婚その後の不毛な家庭生活を赤裸々に描く。恋愛問題についても夫婦の権力関係の不均衡を提示し、結局は女性側のみが従属的立場に置かれることを暴き出す。

第五章「張資平の恋愛小説と「病」」では、張資平の恋愛小説における「病」のイメージを取り上げ、肺結核や婦人病に反映される張資平の文学観を論じる。

男の結核は張資平の作品によく登場する。張は厭な口臭・見苦しい欲望・精神の狂乱という三点をもって、新文学の世界で高尚かつ美しい結核のロマンチックなイメージを逆転させ、肺結核を醜悪な欲望が身体に投影する隠喩とする。

一方、女性の場合は、ヒステリー・性病・婦人病・妊娠・流産などに苦しめられる。性的な苦悶や夫婦関係の不満は女性にヒステリー症をもたらすが、性的放縦もまた女性に花柳病や婦人病を招いてしまう。張資平によれば、女性の欲望は子宮に由来するが、欲望が病を招き、その病は女性の子宮に帰結する。女性は子宮を持っている以上、欲望も病も免れない運命にある。張資平の「女性＝子宮＝欲望＝病」という論理は、十九世紀のフランスの臨床医学における、女性の病気を子宮に還元する「科学的」言説に呼応する。

張資平は病を性的不道徳を裁く最後の手段として取り扱っている。道徳そのものが相対化された時代では、いかなる道徳批判も正当性を欠く上に、時代遅れの説教に見えてしまう。身体の欲望に耽った人物にとっては、身体という次元の罰が最も効果的で逃れられない。

また、病は欲望が身体に現れる投影であり、人間はあくまでも欲望に左右される受動的な客体である。つまり、人間の肉体は欲望に支配される客体であり、欲望が引き起こした罪によって罰せられる運命から逃れられない、というペシミズム的な人間観にたどり着く。

張資平は終始個人の身体を革命の枠組み内に収めることはしなかったが、近代的で自由な身体観を鵜呑みにすることにも幾分の抵抗を示している。結局、伝統と近代の狭間で身体と欲望の出口が見つからず、「病」という逃げ道で道徳批判を下すことになる。

終章では、張資平の小説のなかで、女性に注目する際に二つの矛盾するまなざしが存在することを提示する。張資平は「観察的な視線」で、女性の身体を凝視するのだが、従来指摘されるように女性を性的モノ化、セクシュアル化する視線のなかに、もう一つ異なる眼差し、つまり、女性の身体が虐げられる実態から目をそらさない視座も存在するのである。このような「身体」を凝視する視線の複層性が、張資平文学の複雑さであり、読解する上での一つの指標であることを述べる。